



TOPICS
01

「有明西学園」が開校

今年4月、江東区で初となる小中一貫教育を行う義務教育学校「有明西学園」が開校しました。

ここ数年、江東区における高層マンション建設が急増し、人口が増加していることを受け、学校施設を確保するために建設された同校。江東区が掲げる「公共建築物等における木材利用推進方針」および「区立小中学校の改築・改修に関する基本的な考え方」に基づき、積極的な木材利用を推進することにより、児童・生徒の学習環境の向上や、地場産業の活性化等を図るため、校舎の一部木造化と内装等の木質化に取り組み計画となりました。また、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの自転車競技会場が同校と隣接していることから、国内外の多くの人々に江東区の木の文化を認知してもらうためのシンボルとしても位置づけられています。

有明西学園の大きな特徴である部分的な校舎の木造化については、生徒が日常的に使用する教室や廊下の柱・梁（写真1・2）に耐火集成木





材「燃エンウッド」を使用。燃エンウッドは、「荷重支持部」と呼ばれる木の構造体と「燃え止まり層」、「燃え代層」からなる耐火被覆層で構成されており、万が一火災が発生した場合には最外層の「燃え代層」のみが燃焼・炭化することで内部の温度上昇を抑制するとともに、「燃え止まり層」に配置されたモルタルで熱を吸収することで燃焼を停止させ、部材の中心部にある「荷重支持部」を火災から保護します。また、鉄筋コンクリート造の架構部分が木架構部分を含む建物全体の耐震性を確保する仕組みになっています。

内装の木質化に関しては、江東区が掲げる公共建築物等における木材利用推進方針に則り、教室の床には

カバ材の複層フローリング、腰壁はカラマツの羽目板張り、天井の一部には有孔シナ合板を使用。現しの柱・梁とあわせて、より木の温もりを感じながら学習することのできる空間になっています。また、木の回廊と名付けた吹抜け空間(写真3)にもふんだんに木材が使用され、学校生活の記憶の一部となる空間づくりが演出されています。

その他、図書室(写真4)や体育館(写真5)など、校舎内のいたるところに木材が使われており、例えば、丸柱に26種の希少な木材を貼り合わせて仕上げた「木のシンボル柱」(写真6)や格言や古典の一節、数学・理科の公式を吹き抜きの木の壁面全体にちりば



める(写真7)など、木材ならではのデザインが施されています。また、建物の外壁や軒裏天井を木質化することで、外部の歩行者等が一目見ただけで「木の学校」であることが伝わる印象的な校舎のデザインになっています。

このように、木の温もりを活かした学び舎づくり、子どもたちの豊かな学習環境を創出する空間づくり、災害に強い、人・環境に優しい学校づくりをコンセプトに開校した有明西学園。地域の木材産業と木の文化のシンボルとなる木の学校として、その「江東区らしさ」を世界に伝えていきます。

